

## ワンダフル空手第 33 話 南部カラテ選手権大会

気が付いてみれば、激しかった熱の焦熱はどこかに消えて、いつもの散歩道、枯葉で覆われ、並木の木々も葉の落ちた細い枝先を澄んだ青空の下にさらしている。

エンドレスのような夏だったが、いつの間に夏が過ぎ、肌に心地よい涼しさを感じる秋になった、と思ったがあつという間に肌を刺す寒気漂う冬の季節になった。

アラバマの秋はいつも短い。



懐かしい総主茂兄と気合いの入った演武。白刃とトンファー。

11 月の全日本選手権から帰ってきた後、なにかと勝手な理由を付けて、怠慢な生活が続いてしまい、筆不精になってしまった。反省である。

と言う訳で今朝の散歩、自分にカツを入れ、ワンダフル空手の続きを考える。

歳のせいかな、それとも怠け癖のせいかな、昔の思い出があやしくなっている。

ポツンポツンと浮かんでくる遠い昔の出来事を、細い糸をたぐりよせるように何とか思い出すわけである。

常設道場が出来て私の気合も一段と上がった。入門問い合わせの電話では汗のかきっ放しであったが、別に宣伝もしないのに入門者は後を絶たなかった。

丁度タイミングよく、私に来るちょっと前から {1966~70 年代}、全米でカラテのブームが日ましに広がりはじめたようである。

話がチョットそれるが、アメリカでカラテがブームになる前は柔道が盛んであった。

毎週ウイークエンドには柔道の大会が各地で開催されたようである。

私が生まれ育った時代は昭和である。

あのころの日本では、柔道の大会は全日本選手権とか、各大学の選手権が主で初心者や、幼年、少年、女性の大会はあまり広まっていなかったように思う。

そんな知識と言うか、記憶しかなかった私にはアメリカ各地で開催されていた柔道の大会が高段者だけでなく、初心者、幼年部、少年部、女性等多くの人々が参加して心技体を競うシステムになっていたのに驚いた、と同時に感心させられた。

さすが自由な発想する国、アメリカだと思った。

武道 {柔道、カラテ、剣道その他} 稽古の世界はともすると同じことの繰り返し、繰り返しの続きになり、そこから熱意と言うか、気合いが落ちる場合が多い。

“稽古は頭から入るのではなく身体から入る“技や動きの全て、を身体の中に溶け込ますためには何度も何度も同じ技を練り上げなくてはいけないのである。

稽古の意味もそこに有るのだが、現実はなかなか難しいのである。

平凡な人にはすぐ飽きが出て、そこから稽古に対する気合い、熱意が落ち、稽古の内容が惰性になり、興味が薄れて止めてしまう場合が多い。

そんな柔道 {武道} の世界に、大会は目の前に具体的な他人と競う、目標みせてくれる。

柔道を稽古している多くの人々がエンジョイできる大会はあつという間に全米に広まったようである。70年代前半に、柔道はアメリカ社会で爛塾期に入ったようである。

燃え尽きた柔道熱のあと、アメリカ人は次の武道を自然に求めだすわけである。

ファッションではないが次にミステリアスな日本文化は何か？徐々にカラテの熱が、柔道のすぐ後に続いていた。

素手や素足で板やコンリートブロック等を割る試割の演武はそれまで見た事がなかったアメリカ人に驚嘆と驚異を与えたようである。

カラテの熱はあつという間に柔道を凌駕してしまった。

私の兄から聞いた話だが、余りにも空手の熱が盛んになり柔道が下火になりはじめた時期、NY である柔道の先生が、自分の生徒がロッカールームやロビーでよくカラテの話をするのを聞いて、ある日稽古前に道場に板を持ってきて生徒の前で、バンバン板を割って「どうだ！俺もカラテができる・・・」と啖呵をきった話を聞かせてくれた。

柔道の先生も焦ったようである。

思うに、柔道が旺盛、ピークに達した後、人々の気が何か新しい文化を欲するようになるのは自然の社会の流れである。

余談になるが、武蔵の五輪書、地の巻“兵法の拍子の事“の個所で、「物事に付、拍子は有物なれども・・・空なる事においても拍子はあり。・・・物毎のさかゆる拍子、おとろふる拍子、能々分別すべし。」と武蔵が話している。

人の一生も、社会の流れも拍子が有る。その拍子を“空“と武蔵は言っていると思う。

その拍子をつかんだものが勝利、成功をしようと言っているのである。

凄い達観である。

観念や抽象論でなく物事の本質を見抜いた五輪書は何時読んでも新鮮な感嘆を受ける。

話を私の自叙伝に戻す。

念願だった常設道場もオープンすることができ、指導にも熱が入った。

まず最初に自分の手で育てた黒帯をつくりたかった。強い生徒を育てたかった。

強い生徒をつくりには自分が先に立って組手をしないといけないと思った。

毎日出席した生徒の数、30人、40人…、とにかく全員と組手をこなした。

ウエイトは60キロちょっと、身長は172センチ{家人は165センチと言っている}あの身体で毎日ガンガン組手をこなした。

自分が育てた黒帯ができるまで三年間その組手を続けたのである。

毎日アッチ、コッチに生傷が絶えなかった。

今こうして思い出しながら書いているが、ホントよく身体がもったものだと感心した。

稽古時間も2時間をオーバーすることが殆どだった。

最初の黒帯審査は36人組手をやらした。初段の審査である。

今考えてみると、気負い過ぎていたんだと思う

ある程度の数のアドバンスの生徒が、それなり実力を付けてきた。

当然私の視線が外に向きだした。

なんか前置きが長くなったが今回は全米でのカラテ選手権大会の流れと私が主催した大会の話である。

アラバマに来て2年後ぐらいに、本格的な南部空手道選手権を開催した。

ちょうど日本からも後輩が来てくれて、いろいろ模範演武を披露してくれた。

おかげで大会は大成功に終わった。



大道塾東、極真会大石、円心会二宮、佐藤塾佐藤勝昭、岸信行、三浦、金村、それぞれ一派を創立し、世界のカラテ発展に寄与したカラテ家である。

あのころアラバマでも毎週ではないがカラテの大会が各地で開催され始めた。  
ロンが各地の大会に私を連れて行ってしてくれた。勉強になった。  
日本では考えられないような大会がアッチコッチの街で開催されていた。  
出場選手も多彩である。  
道着も伝統的なカラテ着だけでなく色とりどりの道着が見えた。  
真っ白いパンツに紺と赤のストライプの線を入れて、道着の上はアメリカ国旗を思わせるような星が輝いている、ちょっと日本では考えられないような派手な道着を平気で着ている。恐れ入ってしまった。さすがアメリカだと感心させられた。  
もちろん私は真似をしようとは全く思わない。  
ただそこにアメリカの自由な発想を見たのである。

選手層もいろいろで、幼年部、小学初年の部、少年部、青年の部、壮年部、女性の部、帯ごと、ウエイトごと、などに分けてあった。  
種目も組手、型、武具の型、音楽を入れての型、といろいろあった。  
正直に言って最初にみたときは、私の眼がまんまるになってしまった。  
INVITATION の大会、OPEN の大会など盛んであった。  
とくに私の目を引いたのは他流派が多数参加していることであった。  
いわゆる日本の伝統派と言われた、松濤館、和道流、糸東流、韓国のテッコンドー、中国のカンフー、それに、いろいろな流派の技や型、動きを取り入れて勝手に名前を付けたミステリアスな流派もあった。  
とにかく出場する選手がいろいろな技や動きを使い試合をこなしていた。  
各流派の技や動きの特徴と言うか傾向が見えて勉強になり、同時に刺激にもなった。  
カラテの技や動きに対する考えが広がるように感じた。  
お互いに影響しあっているのが見える。  
人間の歴史を俯瞰するとあらゆる面で社会は刺激し合って発展をしてきている。  
武道の世界でも同じである。

マタマタ余談になるが、日本のフルコンの大会でも、踵落としや、後ろ回し蹴り、とび後ろ回し蹴りなどの大技は海外からの選手の影響が大きいと、私は独断だが思っている。  
なぜかと言うと、後ろ回し蹴りも、踵落としも {内回しではない} 私が現役のころ日本のカラテ家はあまり使いこなしてはいなかったように思う。  
海外からの選手が使いこなすのを見て、刺激を受けたように思う。  
断って置く、あくまでも私一人の考えである。  
文化とはお互いにぶつかり合って影響しあい、そこから新しい文化を創り出す。  
これは歴史が証明している。  
組手の試合ルールは実際に突きや蹴りを当てずに、寸止めするルールもあったが、殆どの大会がポイントシステムの内容でセーフティグローブ、シューズを付けて軽く当てる試合ルールであった。  
試合中選手の攻防が続くなか、突きや蹴りのポイントが決まったと見た瞬間に、主審 {時として副審も} が試合の流れをそこで中断し、主審、副審が判定をする。  
試合の内容がスピードを主とした技を使いこなせないと勝ちあがれないように見える。

パワーより速さ、スピードを主として、くりだす技で、相手にダメージを与えたり、また一発で倒すと言うより、如何に素早く、瞬発的に技が出せるかに勝負の行方がかかっているように私には見えた。

私の言っていることはどの技もそれなりのパワーはあるが、技の何処に重きを置くかということである。

構えも半騎馬立ちのように取り、瞬発力、バネを生かすようにするため、両腕を胸の高さにおき、上体を柔らかく使う。

足の運びも、足首や膝のバネを自然にタメ、そのタメた、バネを活かすようにするため両足を弾むように使い、瞬発力、バネを生かすように動く。

その足の運びから、呼吸を窺い相手との間に飛び込むように素早く入り正拳、顎打ち等を決めるスタイルが多かった。構えた前の手でトビこみながら裏拳も多用していた。

蹴り技は構えた奥足を送って、前足を使う動きから変則的な回し蹴り、蹴り足の膝が脇から出るのでなく構えた前足で膝のスナップだけ蹴る回し蹴り、掛け蹴り横蹴りなどの技が多かったが、時々後ろ蹴りやバックスピキック {後ろ回し蹴り} を使っていた。

選手同士の技が交差する場面が多く、判定がなかなか難しいように思った。

判定が、ともすると選手の顔つき、いかにドラマチックな表情を見せるかによってきまってしまうくらいがあるように見えた。私の個人的な私見である。

面白かったのは型の部である。

大会がポピュラーになった初期のころは伝統的な空手の型を演じる選手が多かったが、時間が過ぎるにつけジムナスティックな派手な動きが型の中に入ってきた。

空転、バク転、ナナメ捻り空転から、回し蹴りを連続して蹴り続けるアクロバットの型も演じる選手が多くなった。バレエダンサーのように蹴り足が高くどこまでも高く蹴り上がらないと上位には入れないようであった。

審査する方も型 { ? } の中にそう言う派手な動きがないと採点を辛くしていたようだ。呆れてしまうと言うより、全くそこまでエスカレートするとは、マイリマシタである。

そう言う大会の流れの中で極真スタイルのノックダウンの大会が注目を集め始める。

既に茂兄はNYで大会を何度も開催していた。

ポイントシステムの大会と違った極真の素手、素足で、突きや蹴りを実際に当ててダメージを与え、または倒す試合ルール of ノックダウンシステムの大会は最初のうちは多くの他流派から畏敬のみで見られていた様に思う。

しばらく時間がかかったが、その後徐々にではあるがノックダウンシステムの大会も各地で開催されるようになった。

後年内弟子をとるようになってから、よく他流派のノックダウンの大会に内弟子君たちが軽量、中量、重量の3階級に出場し毎年のように賞金を稼いでいた。

大会後はしばらく豪勢にレストランなどで食事をとっていた。

残念ながら、私は内弟子君の食事会には招待されなかった。

「テル、マサ、今でも忘れずにおります。」念のため！





大会後の記念写真、先生テルが持って白い封筒は賞金である。

ポイントシステムの大会を見ながら感じた事は、出場選手の稽古体系が違い、私の生徒が出場しても勝つチャンスは少ないように感じた。

2015年の11月中旬に、極真会館の松井館長から世界空手道選手権に招待された。その大会で全空連の模範試合の演武を見ることが出来た。

その模範試合を見ながら、アメリカでのポイントシステムと非常に似ていると感じた。

あの日からよくTVやその他の報道でカラテのニュースを見ることがある。

正直に言って、日本のいわゆる伝統派、全空連の人達の稽古を私は良く知らないのだが、勝手に想像すると、直線を生かした技、特に正拳順突き、逆突きは必ず身に付け、その技動きを得意技まで練り上げないと試合には勝てないのではないかと思った。

相手との間合いに、鋭く入る足の運び、構えた両足、とくに後ろ脚、膝、足首にバネを相手に読まれないようにタメる。

身体、動きの硬さをとるため、目線、上体を柔らかく使う。

構えた両腕を胸の前におき、拳の握りをやさしくとり、肩の硬さを外す。

すべていかに鋭く、素早く得意技の正拳を出せるか気と身体全体を使うように見える。

断っておく、これは全て私個人の勝手な意見である。

2020年の東京オリンピックで、いよいよカラテが採用された。

素晴らしいことである。組手と形の二種目。

相手の試合ルールはポイントシステムによく似ているように思える。  
なんとなくではあるが、試合の予想と言うか、展開が想像できるようだ。

勝負は自分の土俵でするものだとも思った。

健康第一 オス